

混合病棟と単科病棟の看護に対する意識の差異について ～今後の業務改善のために～

C棟6階 ○木村晃子
染井美加
堀内真知子
柚木知香子

I. はじめに

当臓血管呼吸器外科病棟は平成20年4月より病棟編成に伴い、放射線科、皮膚科・形成外科を加えた3科混合病棟となった。看護スタッフにとっては単科病棟と比べ、多種多様な患者を担当することとなり、業務が煩雑化し、それにより看護に対する意欲も低下すると考えられる。川崎らは「業務遂行のためにひたすら努力し達成感を求める一方で多種多様な業務をこなさず意欲を失っていく傾向があるといえる。これは看護婦個々人の自助努力もさることながら業務全体を統括管理していく必要性を示唆している」¹⁾と述べている。そこで、単科と混合病棟での看護に対する意識の差異を明らかにし、今後の業務改善につなげていきたいと、単科・混合病棟へアンケート調査を行った。

II. 研究方法

調査期間：2008年7月11日～2008年7月30日

対象：中央部門を除く単科7ヶ所・混合病棟5ヶ所、師長、外来勤務者、パート、看護助手を除く当院看護師287名。

方法：アンケート内容は関口らの先行研究を参考に研究者が作成した。14項目の選択式アンケートと、一部自由記載とした。アンケートに際し、紙面で研究の目的やプライバシー保護、匿名性の確保、研究に参加しないことでの不利益はないことなどを記載し、同意を得た上で行った。経験年数の内訳は1～2

年目42名(15.7%)、3～4年目42名(15.7%)、5～6年目48名(17.9%)、7年目以上133名(49.6%)、無記入3名(1.1%)であった。 χ^2 検定を用い、 $p<0.05$ をもって有意差ありとした。

III. 結果

回収率は268名(93.4%)であった。アンケート内容は表1、2に示す通りである。

「受け持ち患者の把握ができています」のは混合病棟69.8%、単科病棟84.8%、「看護の充実感を感じている」のは、混合病棟32.5%、単科病棟64.5%、「患者のニーズに応じたケアができています」のは混合病棟29.1%、単科病棟44.7%、「毎日患者のアセスメントを行っている」のは、混合病棟65.9%、単科病棟80.1%、「ケア計画の評価を定期的に行っている」のは、混合病棟52.8%、単科病棟77.6%、であった。この結果から、いずれにおいても単科病棟のほうが高い比率を示した。

「スタッフ間(医師やコメディカル)との話し合いができています」のは混合病棟62.9%、単科病棟78.3%、「協力し合えるスタッフ間の関係ができています」のは、混合病棟85.2%、単科病棟98.7%、「看護師間のカンファレンスを定期的に行っている」のは、混合病棟63.3%、単科病棟84.4%、「リーダーは業務の調整を行えている」のは、混合病棟83.3%、単科病棟93.4%であり、混合病棟・単科病棟とも高い比率を示した。

「看護独自のケアマニュアルがある」のは、

表1 混合病棟・単科病棟別のアンケート結果

質問内容		混合病棟 (%)	単科病棟 (%)	χ^2 検定 - p値
受け持ち患者の状態が把握できていますか？	はい	69.8	84.8	0.00542*
	いいえ	30.2	15.2	
看護を行っていて充実感を感じている	はい	32.5	64.5	0.00001*
	いいえ	67.5	35.5	
患者のニーズに応じたケアが出来ている	はい	29.1	44.7	0.02320*
	いいえ	70.9	55.3	
毎日患者のアセスメントを行っている	はい	65.9	80.1	0.01374*
	いいえ	34.1	19.9	
ケア計画の評価を定期的に行っている	はい	52.8	77.6	0.00006*
	いいえ	47.2	22.4	
スタッフ間（医師やコメディカル）との話し合いが出来ている	はい	62.9	78.3	0.01071*
	いいえ	37.1	21.7	
協力し合えるスタッフ間の関係が出来ている	はい	85.2	98.7	0.00003*
	いいえ	14.8	1.3	
看護師間のカンファレンスを定期的に行っている	はい	63.3	84.4	0.00017*
	いいえ	36.7	15.6	
リーダーは業務の調整を行っている。まだリーダーをしていない方はリーダーの業務をみて調整が出来ていると思う	はい	83.3	93.4	0.01337*
	いいえ	16.7	6.6	
病棟独自のケアマニュアルがある	はい	42.5	66.7	0.00047*
	いいえ	57.5	33.3	
関連分野の書籍資料がある	はい	79.1	90.1	0.01871*
	いいえ	20.9	9.9	
看護独自の機能が十分出来ている	はい	27.4	37.1	0.13121
	いいえ	72.6	62.9	
インシデントレポートをもとにカンファレンスを行っている	はい	71.9	69.0	0.63652
	いいえ	28.1	31.0	

χ^2 検定 * $p < 0.05$

表2 回答理由の内訳に関する集計

スタッフ間（医師やコメディカル）との話し合いができていますか		混合	単科
「はい」の内訳	定期的にカンファレンスを行っている	29名(46.8%)	33名(53.2%)
	必要時カンファレンスを行っている	27名(25.5%)	79名(74.5%)
「いいえ」の内訳	話し合う体制がない	21名(47.7%)	23名(52.3%)
	話し合う機会がない	5名(41.7%)	7名(58.3%)
関連分野の書籍・資料がありますか		混合	単科
「いいえ」の内訳	参考になる本が少ない	16名(51.6%)	15名(48.4%)
	疾患が多様で選べない	3名(42.9%)	4名(57.1%)
看護独自の機能が十分できていますか（複数回答可）		混合	単科
「いいえ」の内訳	事務的な業務が多い	35名(36.8%)	60名(63.2%)
	医師不在時の対応に時間をとられる	37名(38.9%)	58名(61.1%)
	移送に時間がとられる	21名(27.3%)	56名(72.7%)
	コンピューターのトラブルの対応に時間をとられる	19名(36.5%)	33名(63.5%)
インシデントレポートをもとにカンファレンスを行っていますか(複数回答可)		混合	単科
「いいえ」の内訳	時間がない	9名(40.9%)	13名(59.1%)
	話し合う機会がない	6名(33.3%)	12名(66.7%)
	話し合う体制がない	13名(31.0%)	29名(69%)

混合病棟 42.5%、単科病棟 66.7%、「関連分野の書籍ある」のは、混合病棟 79.1%、単科病棟 90.1%であった。以上の項目は優位差をそれぞれ認めた。

一方、統計学的に優位差は認めなかったが、「看護独自の機能が十分できている」に対して、混合病棟 27.4%、単科病棟 37.1%で、全体を通してもっとも低い比率を示した。さらに「インシデントレポートをもとにカンファレンスを行っている」のは、混合病棟 71.9%、単科病棟 69.0%で、全質問のなかで唯一混合病棟のほうが高い比率を示した。

IV. 考察

「受け持ち患者の把握ができています」「看護

の充実感を感じている」「患者のニーズに応じたケアができています」「毎日患者のアセスメントを行っている」「ケア計画の評価を定期的に行っている」の項目のいずれにおいても混合病棟のほうが低い比率を示したのは、混合病棟の看護師が、患者と会話する時間がとれない、看護そのものに時間をとれない、看護が流れ作業になっているなど看護本来の業務が十分に出来ていないと感じていることが考えられる。先行研究により看護師は患者からの評価や仕事の達成感など本来の看護業務を行っているときにもっともやりがいを感じ、逆に仕事が達成されない時に意欲を失うと報告されている。このことから、やりたい事、やらなければいけないことが数多くありなが

ら行えない状況は看護に対する意欲を低下させると考える。

次に、「スタッフ間（医師やコメディカル）との話し合いができて」「協力し合えるスタッフ間の関係ができて」「リーダーは業務の調整を行えている」の項目について、混合・単科病棟とも高い比率を示したのは、各病棟でのチーム間の協力体制が整っているからであると考え。しかし、リーダー業務になると混合病棟の方が病棟全体の把握や医師との対応に時間をとられるのも現状である。川崎らは「職場のチームワークは仕事を続けるうえでの基盤の一つであり、その満足度がある程度得られる事がやる気の高揚につながる」²⁾と述べている。このことから良好なチームワークを組むことは業務の円滑な運営や看護に対する意識の向上にもつながると考える。

「病棟独自のケアマニュアルがある」「関連分野の書籍資料がある」の項目について混合病棟のほうが低い比率であったのは、病棟編成から時間も経っておらずマニュアル化が進んでいないことが考えられる。

混合病棟は疾患が幅広く、多様な病態に即した看護を提供していかなければならない。マニュアル化・業務整理することで煩雑な業務の簡素化、技術の向上にもつながり、患者に対しても適切な看護が提供でき、患者と向き合える時間がとれることで看護独自の機能を行えると考える。それにより看護に対する充実感にもつながると考える。

「看護独自の機能が十分できている」の項目は今回のアンケート調査で混合・単科病棟とも一番低い比率を示した。看護以外の業務として混合病棟で多かったのは、医師不在時の対応であった。これは複数の診療科の医師が診療に携わり、医師不在が多く、指示確認などの対応に時間をとられることや、病棟での決まりごとが徹底されにくい現状がある。医療スタッフ間の協力体制を構築していくこ

とで、看護独自の機能を果たせる時間が増えると考え。それにより看護に対する満足感や充実感の改善につながると考える。

「インシデントレポートを元にカンファレンスを行っている」の項目については唯一混合病棟のほうが高い比率を示した。これは混合病棟であることでインシデント発生リスクが高いという意識が強いのではないかと考える。

今回の結果からは比率的にみても混合病棟のほうが看護業務は煩雑になり看護師の負担が大きいという結果が得られているが、単科でも事務作業など看護以外の業務も多く混合病棟と同様に負担があると感じているのも現状である。混合病棟だから忙しいという単純な問題ではなく、看護師自身の意識の問題も含まれている。看護師が充実感を持ち日々の看護に従事するためには、適切な業務改善を行うことで、看護本来の業務内容に専念でき、それに伴い意識の向上と共に充実感も得られ、質の高い看護が提供できると考える。

以上の点をふまえ当病棟で現在取り組んでいることとして、医師との連携を図るため定期的なカンファレンスを行っており、また業務や看護手順のマニュアルの作成や見直し、チーム会での看護計画の修正、各科での勉強会などを実施している。これらの取り組みにより仕事への充実感が得られ、質の高い看護につながると考える。

V. おわりに

今回アンケート調査を実施し、今後の課題としては、業務のマニュアル化の推進、他職種との連携、定期的なカンファレンスの実施、情報の共有、定期的な業務の見直しなどが必要と考える。

今後業務量調査などを実施し、混合病棟と単科病棟の看護に対する意識の差異をなくし、充実感を向上させる業務の評価・修正を行いながら、生き生きと働ける選ばれる病棟づく

りに努めていきたい。

引用文献

- 1) 川崎久子他：看護婦の仕事意欲に関する研究－勤務経験年数および職位との関連－, 新潟大学保健学科紀要 7(3),306,2001
- 2) 川崎久子他：看護婦の仕事意欲に関する研究－職場でやる気をなくす時の分析－, 新潟大学医学部保健学科紀要 7(2),165,2000

参考文献

- 1) 関口由紀子他：病棟の混合化による問題点と解決策の検討,看護実践の科学,10 - 14,2003
- 2) 内布敦子他：看護ケア構造指標の開発と検討,看護研究 Vol.31 No.2,9 - 20,1998
- 3) 中村あや子他：看護婦の仕事意欲に関する研究－職場でやりがいを感じた時の分析から－, 新潟大学保健学科紀要 7(3),309 - 313,2001